

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳についての断章

山岡洋一

#### - いま翻訳に求められていること

近代日本語が翻訳で作られたとすれば、翻訳は新しい日本語文体を作る役割も担えるかもしれない。いま、翻訳に求められているのは、翻訳調に代わる新しい文体の開発である。

### ひとさまの誤訳(第十一回)

柴田耕太郎

#### - 『英語正読マニュアル』(村上陽介、研究社出版)

本書がすばらしい英語指南書であると述べた上で、どんな名著にも必ずある瑕疵をとりあげよう。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## いま翻訳に求められていること

中堅の出版社の社長と話す機会があった。社長と部下の編集者はワインを飲み、酒に弱い翻訳者はウーロン茶を飲んで、翻訳物を中心とする出版界の現状を論じ合った。こういう場ではいつもそうだが、このときも本が売れない、とくに堅い本が売れないという話になった。社長の話はこうだった。

「最近の若者は本を読まない、以前の大学生なら難解な本を喜んで読んだのに、いまでは少しむずかしい本はまったく読んでくれない、だからほんとうに読みやすくて分かりやすい本をだせと発破をかけているんですがね、なかなかうまくいかないものです。編集の仕事をしていたときは気づかなかったが、採算に責任を負うようになると、サプライ・ドリブンではだめ、デマンド・ドリブンでなければ出版は成り立たないと痛感します。いまは本を買うのがはじめてという読者か、1年に1冊か2冊しか本を買わない読者が喜んで読んでくれる小説が狙い目だ、そんなことは世の中の動きをみていればすぐに分かるはず……」

なるほど、セカチューのような本をだせ、というわけだ。少し前にはハリボタのような本を探せ、チーズのような本を探せと発破をかけていたに違いない。そういう社長の下ではたらく編集者が気の毒になってきた。そこで口をはさんだ。

「それって大変なことじゃありませんか、下戸に酒を売るような話で……、下戸でも贈答用とか、理由があると、年に1回か2回は酒を買うわけですけど……」

しまったと思ったが遅かった。座がすっかり白け、編集者があわてて話題を変えるほどになった。これだから翻訳者はいけない。いつもひとり仕事をしているから、適当に話をあわせる術を知らないのだ。もちろん、そんな翻訳者ばかりではないが。

### 翻訳主義

帰りの電車のなかで頭に浮かんだのが、「翻訳主義」という言葉だ。変わった言葉だと思われるかもしれない。そう、変わった言葉だから、印象に残っているのだ。丸山真実と加藤周一の対談『翻訳と日本の近代』（岩波新書）の冒頭で、加藤が丸山に「お聞きしたいこと」のひとつとしてこう述べている。

加藤 ……三番めが「なぜ翻訳主義をとったのか」ということ。今日の日本とは違って、なぜ、あれほど徹底して翻訳主義をとったのか、という問題です。（3ページ）

「翻訳主義」の意味が書かれていないので、話がどのように展開するのかが知りたくなる。答は43ページ以下にある。後に自由民権運動で有名になる馬場辰猪（1850 - 1888年）が英語で日本語文法書を書き、明治6年（1873年）にロンドンで出版されたことを紹介してこう述べる。

丸山 ……序文は、いま加藤さんのいった、なぜ翻訳主義なのかについて、答えている。じつは、これは森有礼に対する反駁なのです。

森有礼は森有礼で、Education in Japan という、有名な本があります。『シリーズ・オブ・レターズ』、つまり彼の書簡のシリーズなのだが、ニューヨーク・アップルトンで一八七三年一月に出ている。この序文で、英語を国語にしろという有名な議論を展開したのです。大和言葉というのは抽象語がないから、大和言葉に頼っていたのでは、とても西洋文明を日本のものにするにはできない。それで、この機会にいつそ英語を採用しろという議論です。それに対する反駁がこの馬場の序文なのです。この序文は非常におもしろい。もし、日本で英語を採用したらどうなるか、上流階級と下層階級ではまったく言葉がちがってしまうだろう、という意見を述べた。加藤 あっ、それはすごいね。今でもインドの大きな問題の一つは、階級間の深いみぞでしょう。その第一の要因が経済格差、第二の要因が言語。

丸山 すごいんだ。インドの例をちゃんと引き合いに出して、上下とも、国民は同じ言葉をしゃべらなければいけない、と言っている。（44～45ページ）

当時の後進国の多くが英語などの外国語を学び、外国語で西洋文明を学ぶ方法をとったのに対して、日本は徹底した翻訳主義をとった、つまり欧米の優れた書物を徹底して翻訳し、母語で学ぶ方針をとったというのだ。その結果、「上流階級と下層階級ではまったく言葉がちがってしまう」事態を日本が避けられたのであり、この点と、欧米以外の国ではじめて近代化を達成できたこととの間に関係がなかったとは思えない。翻訳主義をとったからこそ、いまの日本があるとすらいえるかもしれない。

### 翻訳調と二重構造

だが注意しておくべき点がある。日本でも翻訳主義

の結果、上流階級と下層階級では言葉が微妙に違う状況が生まれているのである。この点は 柳父章が『近代日本語の思想 - 翻訳文体成立事情』（法政大学出版局）で指摘している。翻訳によって西洋文明をとり入れていくにあたって、日本語の文体が変化したと論じているのだ。翻訳によって「主語」が作られ、「文」が作られ、文末語が作られ、要するに翻訳調というべき新しい文体が作られたという。

翻訳調は当初、蘭語、英語などの学習のために作られ、翻訳に使われた文体だ。身近なところでは、学校英語の英文和訳で使われる文体だと考えればいい。柳父がこの本で指摘しているのは、この文体が翻訳以外の文章に使われ、近代日本語が作られたという点である。つまり、翻訳のために「英文和訳調」とも呼ぶべき文体が作られ（実際には独文和訳や仏文和訳などにも使われるのだが）、それが翻訳以外の文章に使われるようになったのである。「英文和訳調」で翻訳された知識を、日本語で解説し、理解し、日本に適用するために使われたのが「翻訳調」だということもできるだろう。

翻訳調についての柳父の指摘でとくに面白いのは、「第一章『主語』は翻訳で作られた」（1 ページ以下）で 1889 年（明治 22 年）の大日本国帝国憲法が翻訳調だと論じている点だ。たとえば、明治憲法の冒頭部分はこちらだ。

第一条 大日本国帝国八万世一系ノ天皇之ヲ統治ス  
第二条 皇位八皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ継承ス  
第三条 天皇八神聖ニシテ侵スヘカラス  
第四条 天皇八国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ

このように、明治憲法の条文のほとんどが「～八」ではじまっており、たとえば五箇条の御誓文の「広く会議ヲ興シ、万機公論ニ決スヘシ」とは文体がまるで違うと論じ、「大日本国帝国憲法のこの異常な日本語文体は、翻訳の結果として出現した」（7 ページ）と、柳父章は指摘する。この翻訳調が法律、教育、学術論文などに使われるようになり、さらには小説でも使われるようになって、「現代口語文」と呼ばれるようになったという。柳父はこう指摘する。

翻訳による変化は、歴史的にみれば、偶然であり、突然である。言葉にとって、それは、強圧的な変化である。人々はやがて、それに慣れる。しかし、歴史的な伝統が、それによって一挙に変わるものではない。歴史の伝統、言葉の伝統というものを考えるとすれば、その変化はもっとゆるやかであろう。外

圧的な変化は、伝統的な流れとは、かなり次元の違ったところで起こっているようである。そこに、いわば文化の二重構造が造られていく。その構造もまた、外圧による変化とともに、容易に崩れることはないだろう。（126～127 ページ）

翻訳主義の結果、「文化の二重構造が造られ」たことになる。「現代口語文」という名の翻訳調文章体を使う「知識人」と、正真正銘の口語を使う庶民という二重構造である。

最近の若者は本を読まない、以前の大学生なら難解な本を喜んで読んだのに、いまでは少しむずかしい本はまったく読んでくれないと出版界は嘆いている。二重構造という観点からこの現状をみると、何かがみえてくるはずだ。

### 世代間の違いなのか

じつのところ、若者が本を読まなくなったというのは決まり文句であり、決まり文句のつねとして、誰もまともに論証していないように思える。だからほんとうのところは分からない。若者というときに無意識のうちに対象にしているのは大学生だろうが、たとえば大学進学率が 10% ほどだった 1960 年代と、50% になったいまとを比較すれば、大学生のうち本を読む人の比率が下がったとしても、少なくとも出版界にとって深刻な問題になるほどかどうかは分からない。60 年代に大学生のうち 50% が読書好きだったとすると、いまの大学生の 90% が本をあまり読まないとしても、読者層の比率は変わらないことになる。だが、その点はさておいて、若者がたしかに本を読まなくなったとして、話を進めていこう。

若者が読まないとされているむずかしい本とはまさに、英文和訳調で訳されたか、翻訳調で書かれた本である。いまでも、翻訳書のかなりの部分は英文和訳調で訳されているし、法律家や官僚、研究者や学者が書く文章も大部分が翻訳調で書かれている。その一方で、話し言葉は文章体からますます遠ざかるようになっていく。柳父章が指摘した文化の二重構造はまだ消えていない。消えていないどころか拡大しているように思える。若者がむずかしい本を読まなくなったとすれば、この二重構造が「知識人」と大衆という形であらわれていると同時に、中高年と若者という世代間の対立という形でもあらわれていることになる。

中高年の立場からは、世の中で学ぶ価値があるもの、学ぶべきものはかなりの部分、むずかしい本に書かれている。だから、若者がむずかしい本を読まないのは

由々しき事態であり、こんなことでは日本の社会や文化の将来は暗いとすら思える。出版社の経営が成り立たなくなるといった程度の話ではないのだ。だが「いまどきの若者は……」という嘆きは何千年も前から繰り返されてきたという。だから、これもそのひとつにすぎないのであれば、とくに心配する必要もない。いまどきの若者もいずれ中高年になるのだから、むずかしい本を読む必要があることに気づいて、必死に読むようになるはずだも思える。

しかし、話はそう簡単ではない。明治時代に翻訳調が確立してからごく最近までの100年間、二重構造のうち翻訳調文化の側を担ってきたのは、つねにその時代の若者だったからだ。翻訳者や著者もたいていは若かったし、英文和訳調や翻訳調の本を喜んで読む読者は若者が中心であった。そして伝統的文化を担うのが中高年であった。当たり前である。外国の武力に接して真っ先に危機感をもつのは若者だ。外国の未知の文化に憧れるのも若者である。どの時代にも若者は外国の文化を学びたいという意欲をもち、年をとるとともに伝統の世界に戻っていく。だから、文化の二重構造は、翻訳調文化を支持する若者と、伝統的文化を好む中高年の世代間対立としてあらわれるのが自然なのだ。

ところがいま、大酒飲みが焼酎やワインを飲むように教養書をむさぼり読み、未知の世界に憧れてむずかしい本を読んでいるのは中高年、とくに引退して時間をたっぷり使える高齢者のようだ。大酒飲みの老人がいまの若者は酒もろくに飲めないと嘆いているのである。何かがおかしくないだろうか。

### 翻訳調の変身

柳父章は翻訳調について、「漢字、漢文訓読受容以来の異文化受け入れ構造を継承していたとも考えられる」（同上169ページ）と述べ、以下のように論じている。

漢字によるこのような理解の方法は、異文化の意味の理解という問題を考えると、一般には必ずしも非合理的な、非能率なことではない、とも私は考える。異文化の意味は、それが高級な成果であればあるほど、簡単には分からないのがむしろ当然である。簡単に分かっては困るとも言える。漢字表現は、多分に意味不明なところを不明なままに伝達する形を採ってきた。……意味は完全には分からないままにとにかく受容し、やがてしだいに理解していく、と言うよりも、新たな意味をそこに作り出していく。それは、一般に異文化の出会い、異文化の受容、相互理解の過程にとって、実はたいてい必然的な事実であったのではないか。（同上194ページ）

異文化に出会い、異文化に憧れたとき、あるいは、自国を守るために異文化を理解しとり入れる必要に迫られたとき、「意味は完全には分からないままにとにかく受容」する手段として使われたのが英文和訳調であり、翻訳調である。そのかぎりでは、翻訳調文化は好奇心が旺盛で、背伸びして未知のものを知りたいと願う若者に相応しいもののはずである。中高年が担い手になるはずがない。だが、翻訳調の役割はそれだけではない。

翻訳調は異文化をとり入れるための手段として使われてきたが、同時に支配のための手段としても使われてきた。その典型が法律文だろう。法律文体が翻訳調であることは、前述のように、柳父章が大日本帝国憲法を例にみごとに指摘している。そして民法、刑法などの法律がすべて翻訳調で書かれ、その結果、たとえば官界や学界などで、翻訳調が文章の規範になった。官僚や学者は法律に似た文体、つまり翻訳調が格調の高い高級な文体だと考えた。この感覚はいまでも変わっていない。この点はお役所の文書や学者が書く論文を読めばすぐに気づくはずだ。いわゆる堅い文章になっている。このため、官僚や学者が書く文章は、「簡単には分からないのがむしろ当然」で、「簡単に分かっては困るとも言える」ものになっているのである。誰にとって。もちろん庶民にとって。

翻訳調は、官僚や政治家、学者が書く文章の規範という意味ではあきらかに、中高年を担い手とするものだ。若者文化になるはずがない。若者が翻訳調の文章を喜んで読むとすれば、それは、「簡単に分かっては困るとも言える」ほど進んだ異文化に憧れ、それを学びたいと熱望しているときだけだろう。

それほど遠く、それほど進んだ異文化がいま、どこにあるのだろう。

そう考えると、英文和訳調と翻訳調が作られた明治時代とは状況が様変わりしていることに気づくはずだ。

### 後進国型文体としての翻訳調

明治時代には圧倒的に進んだ欧米文化を急速にとり入れる必要に迫られていた。日本が植民地にされないようにするには、それしか方法がなかった。圧倒的に進んだ知識、しかも広範囲にわたる知識を短期間に受容し吸収する必要に迫られていたのだから、ひとつずつを理解したうえで、意味不明なところを解明したうえで訳す方法をとるのは現実的ではなかった。英文和訳調なら、訳語さえ決めれば、ひとまずは訳すことが

できる。たとえば原文に society とあれば「社会」と訳し、nature とあれば「自然」と訳していくことができる。こう訳したとき、訳者は原文の意味を理解していたわけではない。「意味不明なところを不明なままに」訳したのである。この点については、柳父章が『翻訳とはなにか』（法政大学出版局）や『翻訳語成立事情』（岩波新書）でくわしく論じている。

要するに、後進国だった日本が欧米先進国から急速に知識を受容するためにやむをえず使った手段が英文和訳調であり、それを消化するために使われたのが翻訳調だったのである。だから、英文和訳調の特徴を一言であらわすのであれば、後進国型翻訳スタイルだといえることができる。

英文和訳調と翻訳調はこのような性格をもつものなので、いまの時代にあわないことはほとんど自明なのだ。「簡単に分かっては困る」文章によって既得権益を守ろうとする人たちの役には立っても、異文化の理解と受容という本来の目的には、もはやふさわしくないものになっているのである。

少し違った視点からこの点をみると、英文和訳調という方法で進んだ文化を吸収してきたからこそ、いまの日本があるともいえる。だから、英文和訳調と翻訳調を確立し、英文和訳調によって大量の翻訳を行ってきた先人は偉大である。偉大な人たちの苦勞が実って、いまの日本は後進国型の翻訳を必要としないまでに発達したのだ。英文和訳調と翻訳調は歴史的な使命を果たしおえたのである。

### 翻訳調からの脱却

翻訳調が歴史的な使命を果たし、いまや欧米の進んだ文化をとりいれる方法としての意味を失ったことを、若者は敏感に感じ取っているはずだ。支配の手段としてしか意味をもたなくなった翻訳調に、若者は拒絶反応を示している。だから「むずかしい本」、つまり翻訳調で書かれた本や、英文和訳調で訳された本が売れない。話し言葉の世界から翻訳調の世界に飛躍するための手段として好まれてきた教養書が売れない。若者はじつに健全な反応を示しているのだ。

だが、若者が翻訳調の本を読まないからという理由で、「分かりやすく読みやすい本」、じつは内容がないから分かりやすいにすぎない本を売ろうとする出版人が健全だとは思えない。未知の世界に興味を持たない若者というのは、形容矛盾といえるほどありえないことだ。子供は誰でも好奇心が旺盛だ。知識欲にあふ

れている。好奇心と知識欲を大人が押しつぶさないかぎり、若者が未知の世界に興味をもたないわけがない。現状では若者が未知の世界を知ろうとしても、いかにも古臭く、権威主義的な翻訳調で書かれたか訳された本しかないの、需要が満たされない状況になっている。そういう需要を満たしてこそ「デマンド・ドリブン」といえる。ハリポタやセカチューのような本をだすのは後追いであり、ダボハゼである。泥鰌〔どじょう〕はそう何匹もいるものではない。

欧米から学ぶべきことがなくなったわけでもない。欧米にかぎらず、世界のどの地域にも、日本が学ぶべきことはたくさんある。「簡単には分からないのがむしろ当然である」といえるほど遠くはなくなっただけだ。意味が分からないままとにかく受容する必要がなくなっただけだ。だから、翻訳が不要になったわけではない。それどころか、意味が分からないまま、英文和訳調で訳されてきた古典や名著をいま、意味を理解したうえで訳しなおす必要もある。

いま求められているのは、ひとつには英文和訳調に代わる新しい翻訳スタイルだ。「意味不明なところを不明なままに」訳すのではなく、外国語で書かれた原文の意味を母語で伝える翻訳のスタイルである。

同時に、翻訳調に代わる文章体が必要になっている。官僚や学者が格調高いと考えている文体は、庶民を煙に巻くには便利でも、論理的な思考に適しているとはかぎらないと思える。もともと「意味不明なところを不明なままに」訳すために作られた文体なので、意味を理解していなくてもそれらしい文章が書けるという性格をもっているからだ。

近代日本語は翻訳で作られたという柳父章の指摘が正しいとすれば、翻訳は新しい日本語文体を作る役割も担えるかもしれない。日本語の論理性を活かして、古今東西の知識をしっかりと吸収し、新しい知識を生み出せるようにする、そういう文体を作る役割も担えるかもしれない。

## 『英語正読マニュアル』(村上陽介、研究社出版)

この本で並列の and の規則を学んだ。

その理解をもとに、私なりに発展させた規則を述べれば、

and の前後は

品詞が同じ(名詞と名詞、副詞と副詞、形容詞と形容詞、...)

機能が同じ(主語と主語、動詞と動詞、目的語と目的語、補語と補語、...)

時制が同じ(現在と現在、過去と過去、未来と未来、...)

格が同じ(上位概念と上位概念、下位概念と下位概念、...)

資格が同じ(単語と単語、句と句、節と節、文と文、...)

範疇が同じ(同じ分類項目、観点、...)

and の並び方は

1, 2, 3, ..., N - 1 (,) and N. が正式

1, 2, 3, ..., N - 1, N. はリズム重視または列挙未完了

1, and 2, and 3, and ..., and N - 1, and N. は各部分の強調

これだけ知れば、著者のいうように「読解力は少なくとも 1 割程度は増大すると思われる」。その明快な解説をひとつ引いてみよう。

## [本文 P146]

Whatever it was, Jensen found it wherever he looked in wildlife specimens collected three decades earlier, in the Swedish environment, in the surrounding seas, in hair samples from his wife and infant daughter.

*Our Stolen Future*, 90.

(ある翻訳) それは何であるかはともかく、30 年ほど前から集めている野生生物の標本からは必ずといってよいほど、問題の化合物が検出されていたのである。標本の採集場所は、スウェーデンとその近海だった。その謎の物質は、妻や娘の毛髪からも同じように検出された。

訳文から判断すると、翻訳者は、(in the Swedish environment<sub>1</sub>, in the surrounding seas<sub>2</sub>) という並列構造をなす 2 つの副詞句が “collected” にかかると判断したうえで、{in wildlife specimens collected three decades earlier, in the Swedish environment, in the surrounding seas, in hair samples from his wife and infant daughter} のようにダッシュに続く部分の構造を理解したようである。もしそういう理解が正しいとすれば、原文は悪文であると結論せざるを得ない。なぜなら、並列構造がきわめてあいまいだからである。実際には、ダッシュに続

く部分は、ごくオーソドックスな並列構造からなっている。図示すれば、(in wildlife specimens collected three decades earlier<sub>1</sub>, in the Swedish environment<sub>2</sub>, in the surrounding seas<sub>3</sub>, in hair samples from his wife and infant daughter<sub>4</sub>) となる。つまり、(1, 2, 3, and 4) の <and> を省いた型に従っているのである。したがって、この部分は、<30 年前に採集した、いくつかの野生動物の標本、スウェーデンの大気・土壌・水、近海、そして、自分の妻および幼い娘の毛髪のサンプルから> とでも訳出すべきところである。

## [私のコメント]

なるほど、と皆さん納得されたことだろう。だが、ちょっと不満も残る。「標本」と「近海」と「毛髪のサンプル」は日本人の感覚では、並列しにくいのではないか？ 訳者もこの並列が何となく嫌で(理屈がわかっていただけに思えないが)、日本語としての通りのよさをザクッと求めてしまったのだろう。

そうなのだ、冒頭に挙げた並列の規則は正当なものであるが、実際の英文には、それが信頼のおける作者が書いたものであっても、並列が甘いことがよくあり、文法を真面目に学習した実力者ほどかえって、この破格にとまどって誤読してしまうことがありがちなのである。

たとえば、

抽象名詞と具象名詞の並列：For the rest there were gondolas with the lady trailing her hand in the water, clouds, sky, and chiaroscuro in plenty.

雲や空などと、キアロスクーロ(明暗)描法を並列させる神経は日本人にはなからう。

句と、やたらに長い節の並列：Considering our present advanced state of culture, and how the Torch of Science has now been brandished and borne about, with more or less effect, for five-thousand years and upwards; how, in these times especially, not only the Torch still burns, and perhaps more fiercely than ever, but innumerable Rush-lights, and Sulphur-matches, kindled thereat, are also glancing in every direction, so that not the smallest cranny or doghole in Nature or Art can remain unilluminated it might strike the reflective mind ...

state を中心とする名詞句と how 以下延々と続く名詞節が and で並列され、独立分詞構文となってダッシュ以下の主文に掛かっている(この解説を読みたい方は[2003 年 8 月号の拙文](#)を参照あれ)。

「こういう変形も実際には多々あるのだよ」と説得力ある実例をいくつか入れておいてくれば、冒頭例のような誤訳は今後減るかもしれない。そこまで注文するのは、無いものねだりというものかもしれないが...

仕事はていねいで(何しろ前書きによると構想から20年、書き改めたこと5回、というのだ)、実に細かいところまで見ている。例えば、

「優れた辞書でもミスがないわけではないことはいうまでもないが、あらためて注意を喚起するために、具体例をいくつか紹介しておこう。『ジーニアス英和辞典』では、<kirsch>という名詞に対して、「キルシュ《シェリーブランデー》」という語義が示されている。ドイツ語の<Kirsche>が<サクランボ>という意味をもつことを知っている人はすぐに気がつくかもしれないが、これは、本来は、<キルシュ《チェリーブランデー》>となっているべきものであった」(p2)

ドイツ菓子の老舗ユーハイムのキルシュ(kirsch)・トルテと苦味のあるロースト・コーヒーをささやかに楽しんだ若くて貧しい頃が私にはなつかしい。いまでは、フランス料理の食前酒に啜る甘くて強いシェリー(sherry)酒のほうが好きだ(われながら贅沢になったものだ)。

補足すると、シェリー(sherry)は、スペイン南西部ヘレス(Jerez)地方原産のアルコール度を強化した白ワイン。Jerezの古形 Xeresの英語読み sherrisを複数形と誤ったことから生まれた呼称。素敵な異性とご一緒の一夕、お試しあれ。

さて本書がすばらしい英語指南書であると再度述べた上で、どんな名著にも必ずある瑕疵をとりあげよう。

#### [本文 p7]

a. <´>

attaché, blasé, canapé, cliché, communiqué, consommé, élan, entrée, exposé, fiancé, habitué, matinée, métier, outré, passé, précis, protégé, rosé, sauté,

これらの単語で<e>の上につけられている<´>の記号は<acute accent>(鋭(音)アクセント記号)と呼ばれ、フランス語系の単語に主として用いられる。この<acute accent>のついた<é>は、[ei]と発音されるのがふつうである。

#### [私のコメント]

親切にいうなら、もともとフランス語であった単語が英語になったもので、フランス語では[e]と発音されるが、英語では[ei]となった。漢語に対する日

本語の音読みみたいなもの。

次のページでも同じく、原フランス語での発音と英語化した発音を併記すると親切。

「<^> crêpe, fête, rôle

この<^>の記号は<circumflex accent>(曲折アクセント記号)と呼ばれ...<e>は<ei>と発音される」  
フランス語では[ ](と付加する)

#### [本文 p9]

<ç>

façade, garçon

このcの下のかぎ形の記号の<ç>は<cedilla>(セディーユ)と呼ばれ、フランス語系の単語に主として用いられるが、<ç>の文字を表わす子音が[s]に転換することを示す。

#### [私のコメント]

フランス語とスペイン語を混同している。

<cedilla>はスペイン語綴りで、読みは(セディーリャ)。フランス語なら<cedille>で、(セディーユ)とすべきところ。

#### [本文 P14]

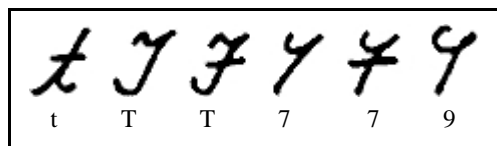
また、アポストロフィが、文字、数字、略語、さらには記号や単語の複数形を作るために用いられることも、必ずしも充分には理解されていないようである。たとえば、<Tomas seldom crosses his t's, and his 7's look like 9's.>は、<トマスはめったにtの横線を引かないし、また彼の書く7は9に見える。>

#### [私のコメント]

英語の学習者には上のような訳文で通るかもしれない。だが翻訳者なら、与えられた文脈のなかで整合性を取ろうという意識が働くので、こういう訳にはしないだろう。この訳ではand「また」、の前後になんら脈絡がない。

「トマスはめったにtの横線を引かない。同様に7の横線を引かないので、彼の書く7は9に見えてしまう」と読むのが正しかろう。

小文字でtとあるが、t T 7 9の連想を働かせてほしい。ちょっと気の利いたフランス料理店にでもいけば、勘定書きはおしゃれなフランス数字で手書きされてくる。この数字の7と9が、7に横線が入っていないと、9と読めてしまうのである。



[本文 P152]

The men who had made Florence the richest city in Europe, the bankers and wool-merchants, the pious realists, lived in grim, defensive houses.

Civilization, 89.

...それでは、原文の並列構造はいったいどうなっているのでしょうか。とりあえず “the (bankers<sub>1</sub> and wool-merchants<sub>2</sub>)” と考えるのが定石である。

それでは、次の “the pious realists” はどうなるのでしょうか。確かに “the bankers and wool-merchants” と並んではいるが、これは “the bankers and wool-merchants” という細目・内訳を別の観点から総括している同格の表現である。つまり “the pious realists” の前のコンマは並列を示すものではなく、同格のものを切り離すためのコンマなのである。問題の箇所は <敬虔な現実主義者であった銀行家と羊毛商人> という意味に理解すべきであることをおわかりいただけるであろう。

[私のコメント]

bankers と wool-merchants が the で括られている以上、同一人である。例：He is a poet and novelist.(詩人で作家)

別人を示すなら the bankers and the wool-merchants、せめて the bankers, wool-merchants の形になるはずだ。ままた、後の the がなくても別人を示すこともあるが、それは誤解なくそうとれる印があつてのこと。例：The poet and (the) novelist were both present at the meeting.(その詩人と小説家はふたりともその会議に出席していた)

「銀行家であり羊毛商であった敬虔な現実主義者たち」

えっ、そんな兼業する人たちってホントにいたの、なんて思った読者もいるだろう。高校でちゃんと習ったはず。私は世界史が好きだったので、今でも記憶しているが、ヨーロッパ第一の富豪といわれたアウグスブルクのフッガー家は織物業から身を起し、羊毛商、金融業と次第に職種を広げていった。花のフロレンス(現地語ではフィレンツェだが、当時の英語読みで覚えたので)のメディチ家はまず銀行を成功させ、羊毛・織物を含む大商人となって東方貿易で稼いだ。いまで言うコンツェルンなのだ。

ちなみに歴史書で定評のある山川出版社の『世界史B用語集』に次の記述がある。

**メディチ家** Medici フィレンツェの大金融業者・大商人。15世紀前半に市政を掌握、富の獲得と文芸の保護に努め、ルネサンスの中心となった。のちに一族からは教皇や王妃となるものが現れた。

**フッガー家** Fugger アウグスブルクを本拠地とし

たヨーロッパ最大の金融業者。15世紀イタリアとの香料・羊毛取引で財をなし、15世紀末、南ドイツで銀山を独占経営した。16世紀初め、その富で、皇帝や教皇にも強い影響力を持ったが、16世紀後半に没落した。

さて、これはどうだろう。どんなに調べようが、専門家にはかなわないという一例。

[本文 P30]

...次に誤植、誤記、誤用の具体例を示しておく。...誤りの箇所を発見してもらいたい。(固有名詞はすべて正しい。)

(練習問題 3)

3. An acute shortage of mutton has hit the city. The shortage is due to the nonavailability of goats from India.

正解：goats boats

[私のコメント]

「町でマトン(mutton)が足りなくなった。インドからヤギ(goats)が入手できなくなったからだ」では、常識からいって確かにおかしい。頭を働かせて、「船(boats)が使えなくなったから」と読み替えるのが、翻訳の定石。

だが、だが、だが！とこれは私も驚いてしまったことなのだが、インド、パキスタン、バングラデシュなど南アジアでは、ヤギの肉のことをマトンというのである。

私の英文教室でこの教材を使っていて、受講生の S さんに指摘された。S さんは大学院博士課程を終えられ、南アジア方面で何年もフィールドワークを重ねてきた、短大でも教鞭をとる少壮の文化人類学者兼有望な翻訳者候補である。

正解：そのままがいい(直しは無し)

まえがきで著者は「読者としては、とりあえず大学生を想定していますが」と書く。そんな実力ある学生をかかえているとしたら勤務校の大阪女子大はずごい学校だ。

「(英文読解の)エラー・アナリシスは、外国語の教師にとって必須の作業である」という村上陽介のような実力もあり教育に熱心な大学語学教師が増えれば、日本の英語教育も変わるだろう。

なお、以上は 2000 年 1 月の初版初刷に基づいた。2刷以降で表現が若干変わっている箇所がある。